

未来への文化遺産～世界に誇る野外博物館北海道開拓の村

第2回 欧米文化による北海道の近代化

野外博物館北海道開拓の村 館長(学芸員)
一般財団法人北海道歴史文化財団 事業本部長

中島 宏一 (なかじま こういち)

1992年、財団法人北海道開拓の村(現、一般財団法人北海道歴史文化財団)入職。北海道開拓の村で学芸員として勤務。2016年より現職。



1 欧米の先進技術を導入して進められた北海道の近代化

第1回は、世界に誇る野外博物館北海道開拓の村の構想から実現までを紹介しました。今回は、「欧米文化による北海道の近代化」と題して、欧米文化の影響を受けた馬車鉄道と主に札幌市内から移築・復元した建造物を取り上げます。

北海道の近代化は、開拓使が多くの外国人技師を雇用し、そのもとで日本人技術者の育成を急ぎ、彼らたちが欧米の先進技術を駆使して進められました。お雇い外国人と呼ばれた外国人技師たちは総勢78人で、そのうち48人までがアメリカ人でした。開拓顧問のホールレス・ケプロン、札幌農学校教頭のウイリアム・スミス・クラーク、地質のアンチセル、鉄道技師のクロフォード、酪農のエドウィン・ダンなど、アメリカ人技師を挙げたら枚挙にいとまがありません。こうしたことから、北海道の近代化は主にアメリカの文化をもって進められたといわれています。人々の暮らしぶりでも、明治期以降に町づくりが始まった札幌をはじめとする道内各地と幕末に開港した函館の町の雰囲気が違うのは、前者がアメリカ、後者がヨーロッパの文化の影響を受けているからです。^{*1}

それでは、北海道開拓の村に、欧米文化の香りを探してみましょう。

2 日本で唯一、本格的な営業運転を行う「馬車鉄道」

「シャンシャンシャン」と馬鈴を鳴らした馬車鉄道が、旧札幌停車場前から農村群の旧ソーケシュオマベツ駅通所前までの市街地のメインストリートおよそ500mを5分ほどかけてゆっくりと走ります。開拓の村の馬車鉄道は大正時代に札幌の町を走った札幌市街軌道がモデルです。同鉄道は、1909(明治42)年に石山(現、札幌市南区)で採掘された軟石を札幌市街まで輸送することに端を発し、現在の国道230号を山鼻まで運行しました。その後、1912(大正元)年に札幌中心部に路線を延長して札幌駅まで到達、以後、市内に路線網を拡大します。そして1918(同7)年から電車化が進められると同時に改軌(線路幅762mmから現在のJR線と同じ1,067mmへ)され、現在の札幌市電へと発展していくことになります。

日本における馬車鉄道は、文明開化の東京を象徴する乗り物として、1882(明治15)年、新橋と日本橋(後に浅草)間に開業した東京馬車鉄道が始まりです。その後、馬車鉄道は全国に普及してい



旧開拓使札幌本庁舎と馬車鉄道

*1 お雇い外国人は、アメリカから48人のほか、中国13人(主に農夫)、ロシア5人(建築)、イギリス4人、ドイツ4人、オランダ3人、フランス1人でした。主な職務は開拓顧問、測量土木、地質鉱物、農業牧畜、機械工作、学校教師、医師、缶詰製造、札幌農学校、鉄道建設、採鉱、石狩川改良、汽船乗組員、建築、裁縫、革鞆、外国船取締、通訳、農夫等多岐にわたりましたが、建築を設計する技師はいませんでした。

きます。北海道では1897（同30）年に函館の中心部と湯の川間に開業した亀函馬車鉄道が最初で、現在の函館市電へと歴史を刻んでいきます。その後、岩内、旭川、登別、札幌郊外で馬車鉄道が開業していきます。

開拓の村の馬車鉄道車両は新幹線などを製造している鉄道車両メーカーで製作され、線路の幅は762mm、馭者（運転手）と車掌が乗務し、馬一頭で車両を引く姿は、往時を本格的に再現した馬車鉄道として、常にお客さまで賑わい親しまれています。

季節は冬。線路上に雪が積もると馬車鉄道は運行を取りやめ、庶民の移動手段は馬籠へと変わります。開拓の村でも十分な積雪状態になると馬籠を運行して村内を回遊します。馬が吐く白い息と馬鈴の音が響き、冬の開拓の村に幻想的な情景を醸し出します。

3 近代へ向かう北海道のシンボル「旧開拓使札幌本庁舎」

開拓の村の出入口になっている旧札幌停車場を抜けると、左手に大きな白い建物がそびえます。この建物は、1873（明治6）年現在の北海道庁赤レンガ庁舎北隣に完成した開拓使札幌本庁舎を外観だけ再現したもので、建築規模は当時と同じです。この建物の原案はケプロンで、開拓使工業局管轄課の日本人技師が実施設計したといわれています。これは、故・遠藤明久氏（北海道工業大学名誉教授）によると、設計図が尺寸制によって作成されていること、外国人による外国尺の原設計図が残っていないこと、全体として洋風工法の修得に多少の未熟さがあったことなどから判断されています。

この建物を象徴する中央の八角ドームは、アメリカン・ジョージアン様式の影響を受け、当時のアメリカの州議会に多かった建築様式を採用したものです。直



ボストン州議事堂

接的には、マサチューセッツ州ボストンの州議事堂かメリーランド州アナポリスの州議事堂がモデルであろうとされています。また、最初の設計では構造が木骨石造でした。これもアメリカの州議事堂の石造建築の影響を受けているといわれます。しかしその構造は実現しませんでした。それは、札幌近郊で石材が豊かであることはわかっているにもかかわらず、まだその輸送が困難であったということでしょうか。

さて、これから町づくりが始まろうとする平原に近い札幌に、突如として出現した開拓使札幌本庁舎でしたが、1879（明治12）年1月17日に失火で全焼してしまいました。当日は黒田清隆長官が札幌滞留中で、自ら消火を指揮し、庁員、消防団のほか、農学校生徒、琴似と山鼻の屯田兵、監獄の囚徒まで動員して消火に努めましたが、酷寒期で消火用水が氷結してなすすべもなかったといわれます。その後、庁舎は建設されることなく、新庁舎は1886（同19）年北海道庁設置に伴い1888（同21）年に竣工した北海道庁舎（通称赤レンガ庁舎）まで待つことになります。

4 開拓使の旗

旧開拓使札幌本庁舎の軒高は11.7mで一般建築3階建て相当、さらに棟高は17.2m、デッキになっている塔屋の頂部は25.9mで、そこから7.89mの旗竿が立っています。その旗竿の先で風になびいているのが北極星を示す赤い五稜星、開拓使の旗です。五稜星は「開拓使印」「開拓使章号」などと呼ばれ、各種の旗章や服章、建物の装飾、官営工場製品の商標などにデザインされ、親しまれていくことになりました。北辰（北極星）はその清冽な光で新天地に挑む人々の励ましとなり、まさしく開拓使のシンボルマークとなりました。その遺構は、開拓使ビールを前身とする現在の「サッポロビール」のラベルなどに見ることができます。

ところで、現在の「北海道旗」はいつ作られたのでしょうか。それは開道100年を控えた1968（昭和43）年までに道旗を制定する機運が高まり、前年に一般公募を経て、現在の道旗と道章が制定されました。道旗の配色は、かつての北辰旗をベースとして北の海や空

を表す紺色とし、中央に配置した道章は道民の不屈のエネルギーを表す赤い七稜星で表し、光輝と風雪を表す白い光で囲んでいます。

5 国の重要文化財「旧開拓使工業局庁舎」

開拓使工業局とは、官庁（開拓使札幌本庁舎、豊平館）、官舎（屯田兵村）、学校（札幌農学校）、病院、倉庫などの建設・修繕といった営繕事業、道路、橋梁、溝渠、堤防などの土木建設事業、製材、木工、鉄工などの諸工場（工作場）を経営した部門で、明治初期の北海道開発政策上で極めて大きな業績を残しました。

開拓の村に移築復元された旧開拓使工業局庁舎は、札幌市大通東地区に建設された官営工場の事務棟として、1877（明治10）年に建設されました。そして1969（昭和44）年に解体工事を免れ、開拓の村にやってきたこの建物が「軒下の持送り、ポーチの破風飾り、通り抜け玄関ホール兼階段室をもつ平面構成などにアメリカの建築書を参考にし、洋風建築を習得したことが確認される。明治初期の北海道開拓を支えた工業局工作場の現存唯一の遺構であるとともに、同局営繕課の設計業務の実態を示す建物として、価値が高い」と評価され、2014（平成26）年8月、国の重要文化財に指定されました。正面玄関は両開き唐戸、窓は上げ下げガラス窓で、1階の窓は家根形＝三角のペディメントを飾っています。ペディメントは開拓使の前期洋風建築の特徴の一つで、玄関ポーチは柱上持送りとレース模様の破風板で飾られています。軒下には豊平館の持送りによく似た形状の持送りが施されています。

このような洋風の意匠を取り入れた建築技法ですが、お雇い外国人には建築を設計する技術者がいなかったことには驚きです。さらに、建築材料や機械を含めた建築行為総体の技術体系をアメリカを中心とす



豊平館

る欧米から移入し、日本人建築家が実現したという道外の他府県には類を見ない独自の洋風文化を生み出しました。つまり、開拓使が建築した洋風建造物は、単にデザインばかりではなく、板ガラスの普及による採光と防風の実現、防寒・断熱意識の啓蒙、洋風建築とセットで導入したストーブの普及など、後の庶民の住宅に多くの影響を与えることになりました。

6 今に残る開拓使時代の建物

開拓使時代（1869～1882）に建てられ、現存する建造物は道内で10数棟あり、開拓の村にはそのうち工業局庁舎と旧開拓使爾志通洋造家、旧山田家養蚕板倉の3棟が移築復元、保存されています。このほか、札幌市内には「旧黒岩家住宅（旧簾舞通行屋）」、「琴似屯田兵屋」、「旧札幌農学校農校園模範家畜房（モデルバーン）」、「旧札幌農学校演武場（札幌時計台）」、「偕楽園水木清華亭」「豊平館」「北海道大学農学部博物館旧本館（旧札幌博物館）」、「旧永山武四郎邸」*2、北広島市には「旧島松駅通」、当別町では「旧伊達邸別館」があり、道南の函館には「市立函館博物館第1号館（旧開拓使博物場）」、「市立函館博物館郷土資料館（旧金森洋物店）」、「旧開拓使函館支庁書庫」が残存しています。

7 欧米文化の影響を受けた和洋折衷建築「旧開拓使爾志通洋造家」

この建物は開拓使の職員住宅、つまり官舎です。開拓使の初期の官舎は軒が低く、板葺石置屋根、簷子下見板の外壁、窓は障子に雨戸といった本州以南の風土で形作られた伝統的な和風建築技術によるものでした。開拓使顧問ケプロンの指導のもとで洋風建築が進められると、1873（明治6）年以降の官舎はすべて洋



旧開拓使爾志通洋造家（白官舎）

*2 旧永山武四郎邸の建築年代は明治10年代前半とされています。

風建築として、製材機械も輸入して徹底的な洋風化を推し進めることになりました。そして開拓使札幌本庁舎をはじめ、洋造式邸、洋造壺邸（開拓使外人教師宿舎）、勅奏邸（勅任官、奏任官官舎）大主典邸（課長クラス官舎）、小主典邸（課長補佐クラス官舎）などがアメリカの建築様式を取り入れて、日本人技術者によって建設されました。このうち、大主典邸と小主典邸は「青官邸」と呼ばれましたが、実際の外壁色は暗い緑色であったといわれます。

さて、開拓の村移築復元されたこの建物の外観は西洋下見板張り、上げ下げ窓を採用した洋風である一方、内部は畳敷きの和室、座り流しや煙出しを配した和洋



折衷様式で、構造は札幌時計台と同じでアメリカ中・西部で流行していたバルーン・フレーム構造が採用されています。

旧開拓使爾志通洋造家内の座り流し 1878（明治11）年にこの建物が建った当時、2戸分1棟の建物が4棟並行して建てられていたので「西洋長屋」とも呼ばれました。また、「白官舎」と呼ばれたのは壁一面が白く塗られていたからです。建物内部に入ってみると1戸あたりの専有面積が大変広く、台所と1階2階合わせて7つの部屋があり、現在の間取り数では7Kとでもいうのでしょうか。

ところで、爾志通とは現在のどの通りを指すのでしょうか？

1872（明治5）年9月、開拓使は札幌本府の市街に「北海道国郡名」の町名を付与し、1881（同14）年6月、現行の条丁目制に改めるまで採用します。町名は道路名でもあり、東西南北を大通と創成川を境に呼称を変えました。例えば、現在の南一条通は創成川から西方は渡島通、東方は日高通としました。その後、市街の発展に対応して町名を2回追加しますが、使える国名も底をつき、アメリカの都市の街路名を参考にして、現行の条丁目制に改め、現在に至ります。ちなみに、爾志通は現在の南2条通西部の地域です。

8 札幌冬季オリンピックと旧札幌警察署南一条巡査派出所

1972（昭和47）年のアジア初の冬季オリンピック大会開催に向けて、札幌市内の街並みが大きく変わろうとしているなか、石狩街道の拡幅工事に際し、1911（明治44）年に建てられたレンガ造りの札幌警察署南一条巡査派出所がその役割を終え、開拓の村に移築復元されることになりました。この建物のほかにも、明治・大正・昭和時代に建てられた数多の歴史建造物がオリンピック開催に伴う町の再開発の影響を受け、消えていったことと思います。現在、この建物があった跡地は「創成川公園」として整備されています。

前回紹介しましたが、この建物を移設する際、レンガを解体することができないために屋根だけを取り外してトレーラーで輸送しました。博物館明治村（愛知県犬山市）と江戸東京たてももの園（東京都小金井市）にも東京都内で使われていたレンガ造りの交番が移築復元されていますが、いずれも開拓の村と同じく、解体せずにトレーラーで輸送しています。

今回は「野外博物館北海道開拓の村の魅力」と題して、開拓の村の歴史的建造物をとおしてニシン漁や養蚕、炭鉱など当時の生業や産業、移住者たちが郷里から持ち込み代々伝えてきた生活文化や母国との関わり、日ごろの活動で見つけたちょっとしたエピソードなどについて紹介したいと思います。



移築前南一条交番（1971年）



創成川公園